

( 1 ) 小泉首相はやはりおかしい , ( 2 ) フランス寓話が問いかけるもの , ( 3 ) 白昼堂々、4人組が , ( 4 ) 「戦後」から未経験の「戦時」

伊豆利彦のホームページ <http://homepage2.nifty.com/tizu/index.htm>  
<http://www1.ezbbbs.net/27/tiznif/> より

1346 . 小泉首相はやはりおかしい

[返信](#) [引用](#)

名前 : 伊豆利彦 日付 : 11月13日(土) 19時57分

岡田民主党党首とのやりとりで小泉首相の答弁はあまりにもひどいものだった。しかも自分はいかにも得意そうな表情をしていたので奇異の感を抱いた。この人は異常を来しているのではないかと思った。

これはどうも「私」だけの感じではなかったらしい。

次の記事があったので紹介する。

日刊ゲンダイ Dailymail Business 2004年11月13日号 -1

“自衛隊がいるところが非戦闘地域”

小泉首相に精神鑑定の必要性 相当おかしい暴言失言の数々

この人の頭は大丈夫なのか。党首討論で「自衛隊が活動している地域は非戦闘地域だ」と、とんでもない答弁を繰り返し、大ひんしゆくを買った小泉首相。記者団には「適切ないい答弁だった」と自画自賛だ。ここまでくると単なる「変人」というレベルじゃない。精神鑑定が必要じゃないのか。

(中略)

やっぱり、どこかおかしいんじゃないか。東邦大医学部助教授の高橋紳吾氏(精神科医)はこう分析する。

「最近の首相は、他人を小バカにした発言が目立ちます。“自分だけが絶対に正しい”という独善的な気質の表れで、純粹培養で育ったお坊ちゃまタイプに多くみられる傾向です。精神医学上は『パラノ』(偏執狂)。自分の世界にこもり、ある意味ナルシスト。他人の意見を受け付けず、自分の考え、偏見に固執するのが特徴です。『信念の人』といえればカッコいいですが、要するに頑固なだけ。自分に都合の悪い情報を遮断するため、“裸の王様”になっているのです」

こんな人物に郵政民営化や三位一体改革、自衛隊のイラク派遣延長など山積する課題を任せられることができるのか。

小泉首相に必要なのは改革より静養.....。

<http://www.ngendai.com>

---

1347 . フランス寓話が問いかけるもの ファシズム牽制 [東京新聞]

名前 : なるほど 日付 : 11月13日(土) 21時32分

<http://www.asyura2.com/0401/bd33/msg/752.html>

<http://www.freeml.com/ctrl/html/MessageForm/%20asyurabbs-ml@freeml.com/102551/>

---

1348 . 白川勝彦Webサイト 日々是考日

名前 : なるほど 日付 : 11月13日(土) 21時40分

白昼堂々、4人組が!

<http://www.liberal-shirakawa.net/tsurezure/tsurezure.html>

---

1349 . 「戦後」から未経験の「戦時」,

名前：なるほど 日付：11月13日(土) 21時47分  
そして未来の「戦後」へ [小倉利丸氏]  
<http://www.asyura2.com/0403/war50/msg/714.html>

1347 . フランス寓話が問いかけるもの ファシズム牽制 [東京新聞]

<http://www.asyura2.com/0401/bd33/msg/752.html>

## フランス寓話が問いかけるもの ファシズム牽制 [東京新聞]

<http://www.asyura2.com/0401/bd33/msg/752.html>

投稿者のらくろ 日時 2004年2月14日 10:29:52:lijcWyS1gzuJk

[http://www.tokyo-np.co.jp/00/tokuho/20040214/mng\\_tokuho\\_000.shtml](http://www.tokyo-np.co.jp/00/tokuho/20040214/mng_tokuho_000.shtml)

フランス寓話が問いかけるもの

「茶色の朝」というフランスの寓話（ぐうわ）が注目を集めている。日本でも昨年暮れ、邦訳（大月書店刊）が出版された。茶色はファシズムの象徴。原文はわずか十一ページ、声高ではなく「ファシズムの危険は市民の事なかれ主義に潜む」と指摘する。フランスではベストセラーとなり、同国や欧州で台頭する極右勢力の動きをけん制した。戦後初めて戦地に自衛隊が派遣された。「茶色」の危険は日本社会とは無縁だろうか - 。

この本の作者は仏ブルノール在住の臨床心理学者フランク・パブロフ氏（57）。父親は「反ファシズム」を掲げたスペイン人民戦線に義勇兵として参加したブルガリア人で、パブロフ氏も仏、ブルガリアの二つの国籍を持つ。セックス産業に従事するアフリカやアジアの子どもたちの人権保護などを訴えてきた。

11ページの訴え 1ユーロで販売

原本の出版は一九九八年で、パブロフ氏は印税を放棄し、一冊一ユーロ（約百三十円）で発売。二〇〇二年四月、仏大統領選の第一回投票で極右政党国民戦線のルペン党首が18%の支持を得た直後からブームを呼び、教材にも使用されるうち、この年の年間ベストセラーになった。これまでに五十二万部が売れた。

その後、英国、ドイツなど十カ国以上で訳され、日本では映画監督などで知られる米国のヴィンセント・ギャロ氏が挿絵を担当。初版（六千部）はたちまち売り切れ、増刷中だ。

筋書きはこうだ。主人公はごく普通の男性市民。ある日、遊び仲間の友人から飼い犬を安楽死させたと知らされる。理由は、政府が毛が茶色以外の犬や猫はペットにできないという法律を定めたためだ。

違和感放置して染まりゆく日常

その後も日常に小さな変化が起きる。このペット制限を批判した新聞が廃刊され、その系列出版社の本も消えていく。

しかし、「（政府の認めた）『茶色新報』も競馬とスポーツネタはましかから」と、さして不自由のない生活に主人公はまだ、声を上げない。だが、ある日、友人をはじめ、多くの人々が逮捕され始める。過去に茶色以外の動物を飼っていたことを犯罪と見なす法律ができたためだ。「茶色の朝」、主人公にも危険が迫る - 。

邦訳に「メッセージ」という形で解説を寄せた高橋哲哉・東大大学院教授は「フランスの極右はナチスに協力した歴史を持つ。国民戦線は一九七二年に結成されたが、勢力を伸ばしたのは八〇年代。失業の増加や欧州連合（EU）統合問題で不満を募らせていた国民の一部が移民排斥を掲げた彼らに共感を抱き始めた」と同書の歴史的背景を語る。

同教授は「日本で右傾化が顕著になったのは、歴史教科書問題が注目された九〇年代。バブル崩壊後、経済不安から不満を募らせた国民はスケープゴート（いけにえ）を求めた。その対象がアジアの隣人。その状況はフランスの極右台頭と類似する」と指摘する。

一人一人が自覚 思考停止やめて

同教授は「メッセージ」の中で、一人ひとりが「（小さな変化を）やり過ぎさないこと」「思考停止をやめること」と訴える。

「日本もだいぶ、茶色になっている。例えば、多くの人は民族学校の朝鮮人生徒への嫌がらせをおかしいと思う。戦後民主主義の最低基準に触れるからだ。でも、自分の小さな生活が脅かされないと放置する。こうして茶色に慣れていく」

同書を読んだノンフィクションライターの魚住昭氏も「ここ数年、日本で起きたことを振り返ると“茶色の朝”はもう来てしまったんじゃないか」と話す。

「最近まで『新たな戦前』という言葉聞いていたが、イラク派遣をした段階で戦前は終わった。次は本物の戦争が待っている」

魚住氏は一連の流れの底流として、九〇年代のグローバリゼーションの流れを指摘する。米国の圧力による規制緩和が国内産業の空洞化を生み、さらに逆輸入で地場産業がつぶされる。

定職を得ていた人々が振り落とされる不安定な状況を乗り越えるため、国家は治安強化、情報コントロールを強めているという。

ブレーキ壊れて法律が次々成立

その流れが顕著になる起点を、同氏は九五年の阪神大震災やオウム真理教事件とみる。立法面では九九年の自公連立発足以降、「法律化のブレーキが壊れ、官僚がかつて出したかったがあきらめていた法律が一気に通る状況になった」という。

「一連の治安強化を横目に自分の中にはやばいという警戒感と仕方ないという気持ちの両方があった。盗聴法一つとっても対象は暴力団だから、と抵抗感が少なかった。だが、一つ一つ譲歩していった結果、露骨な状況ができていた」

同氏はメディアの責任にも言及する。例えば「イラク復興支援」という言葉をイラクに派遣された自衛隊の報道に使う。「復興支援か否かが論議になっているはずなのに、報道で無自覚に多用する。何回も報じられるうちに違和感が消え、既成事実化されていく」

同様に改憲や教育基本法改定など今後、政治焦点となる課題も規定の流れと報じられがちと批判する。

「正直、この全体主義的な流れは止まらないのではないかと。だが、この先には徴兵制が待つ。自分は兵隊に取られないが、子どもたちのために何とかしたい」

現代日本の風俗、事件を分析してきた東京都立大の宮台真司助教授（社会学）も同書について「『なんだか茶色になっていくなあ』という漠たる不安を抱えた日本の現状にうまく照準する部分がある」と論評する。

同助教授は「第二次世界大戦の開戦決定という合理的な判断が必要とされる場面で、日本は引けないまま進んできた」と評す。そのうえで、日本社会を「火にかけられた鍋のお湯の中のカエル」に例える。

「カエルはだんだん熱くなっても飛び出さず、そのまま丸ゆでされてしまうのに似ている。わずかにおかしいと気づいた人がいたとしても声を上げない。カエルは『周りの誰も飛び出さないからまだいい』とそのままゆでられてしまう」

こうなってしまう理由として「（多くの日本人は）周囲に少数派に属する友人がおらず、異質な人間と接触することがほとんどない結果、自分は多数派、あるいは勝ち馬に乗っていると信じている」と指摘する。

「日本ではメディアも運動家も、分かりやすい言葉で『早く鍋から出ないとまずい』と伝えることができていなかった。この本はそうした人々に問題を分かりやすく伝えている」

もう手遅れかも でも絶望せずに

前出の高橋教授は同書の「メッセージ」で「では、どうすればいいのか」という問い自体にも懸念を覚えると記す。「他者から指示してもらおうというのはそこに国や『お上』の方針に従うことをよしとするのと同型のメンタリティーがあるのではないかと感じられてならないのです」。同教授はこう話を結んだ。

「正直、手遅れかもしれませんが、でも、絶望したら終わり。本書では一人ひとりに考えてほしいと訴えました。今はもう一歩踏み込んで、声を上げ、行動してほしいと思っています」

[次へ](#) [前へ](#)

[空耳の丘](#) [33掲示板へ](#)

フォローアップ:

[『茶色の朝』書籍紹介](#) のらくろ 2004/2/14 11:00:18 (5)

- 。 [「黄色いハンカチ」と「茶色のペット」の類同性](#) のらくろ 2004/2/14 15:26:11 (4)

[物語](#) のらくろ 2004/2/14 18:09:11 (3)

[上の「物語」が仏語原文とその機械翻訳英文、下の「物語」が日本語版です。\(本文なし\)](#) のらくろ 2004/2/22 23:08:52 (0)

[物語](#) のらくろ 2004/2/22 22:56:10 (1)

[Re: 物語](#) ASNO 2004/5/05 10:55:57 (0)

1348 . 白川勝彦Webサイト 日々是考日

白昼堂々、4人組が!

<http://www.liberal-shirakawa.net/tsurezure/tsurezure.html>

2004年11月11日

No.221

### 白昼堂々、4人組が!

1. 被災地の視察から東京に帰ったのは、今週の月曜日の午後でした。風邪気味だったので、すぐ東京に帰ることにしたのですが、帰る途中から容態は悪くなるばかりでした。風邪薬を飲んで、厚着をしてベッドで寝ることにしました。しかし、一向に治まる気配はありませでした。だんだんひどくなるばかりです。これは仕方ない、いい子になって寝るしかないと覚悟しました。1日も休めば治るだろうと思ったのですが、なかなか治らず、丸4日寝てしまいました。

休んでいる間も、ニュースだけは見ました。新潟県中越地震の余震はなかなか収まりません。イラクでは武装勢力の掃討と称して、多数の市民がいまだ生活している、ファルージャへの総攻撃が始まりました。いろいろなことがありましたが、パレスチナ人民のカリスマであるアラファト議長の危篤、そして死亡の報道。平壤ではじまった日朝実務者協議 記者団の同行が認められなかったために詳細は分かりませんが、事の性質上、あまり成果は期待できそうにもありません。中国船籍と思われる潜水艦の領海侵犯。ただでさえ冷え切っている日中間の政治的関係に、悪影響を及ぼすことが懸念されます。思うように風邪が治らないので、イライラしているところに、こんなニュースばかりですから、本当に憂鬱な気分になってしまいます。

これらのニュースは、本来ならば、その一つひとつにそれ相当のコメントを加えなければならない重大な出来事です。しかし、体調は依然としてすぐれません。また、もう少し事態の推移を見守りたいものもあります。ですから、今回はこれらに対するコメントはあえて一切せずに、今日私が体験した空恐ろしいことを、皆さんにお知らせします。

2. 今朝、午前6時過ぎに私は目覚めました。体調はいくぶん昨日よりは良いものの、依然として本調子とはいえない状態でした。昨日の夕食から何も食べていなかったため、お腹が空いていました。食べるものは食べないと風邪も治らないので、家内が用意してくれたお粥を食べました。食欲はありましたが、美味しくいただけました。デザートにみかんをふたつ食べて、もう一度ベッドに戻りました。例の朝の散歩は言うに及ばず、いくつかある、本当は急いでやらなければならない仕事すら、とてもできる状態ではありませんでした。

昨日もほとんど寝ていたのですが、ベッドに横になるとまた眠れるのです。これが病気ということなんですね。4時間くらいぐっすり眠りました。10時ころ目が覚めました。また、下着がびしょりと濡れていました。これを脱ぎ捨て、新しい下着を身に付け、外出着に着替えて、私は渋谷に向かいました。3日間も風呂に入っていないので、髪は乱れていまし、髭ものびていました。ですから、普段は地下鉄ですが、むさ苦しい格好なので、タクシーで行きました。どうしても今日中に振込んでおかなければならないという用件があったからです。

タクシーを降り、2箇所の金融機関に寄り、私は渋谷に来た用件を済ませました。熱のためでしょうか、すごく喉が渴いていました。バニラシェイクを飲みたくてなって、馴染みのモスバーガーに行こうと、歩

いているその時でした。何処となく、きたいかつい格好をした4人組に、いきなりグルリと囲まれました。私は、反射的に両手を入れていたベストのポケットから手を出し、身構えました。私の手には、タバコとライターが左手に、右手にはライターがありました。4人組はズボンのポケットを中のものを見せてくれ、財布を見せてくれというやいなや、私のズボンのポケットの上を強く触ってくるのです。一瞬何が起きたのか、状況を把握するのに時間がかかりました。私が4人組の襲撃を受けたのは、八チ公前交差点から100メータ くらい道玄坂を登った広い歩道で、通行人も多いところでした。

3. 白昼堂々、突然4人組にグルリと囲まれ、いきなりズボンのポケットの中にあるものを見せろといわれて、ズボンを強く触られたのです。私は腕に自信にあるわけではありませんが、お前たち一体何なんだ、冗談じゃないといって突き飛ばすなり、ぶん殴りたくなりました。でも、幸いにも私は冷静さを少し残していました。それをやったら、彼らの思う壺だと瞬時に判断する思考能力が、働いていたのです。そうなのです。私を白昼堂々襲ってきた4人組は、警察官だったのです。少しむさ苦しい格好だということは、私は自覚しておりましたが、だからといって警察官の職務質問を受けなければならない状況ではないということは明らかでした。それも質問などというものではなく、いきなり4人にグルリと取り囲まれ、ズボンの左右のポケットを、そして財布の入っているズボンの後のポケットを、4人の屈強な男に、交々強く触られたのです。彼らが制服を着ていなければ、反射的にこれを突き飛ばすなり、殴り飛ばすなりして、私は自分自身を守ったでしょう。しかし、この自然な行動を私がとれば、彼らが、待ってましたとばかり公務執行妨害で私を逮捕することは、火を見るよりも明らかです。私は、弁護士である自分に戻っていたのです。

私は、私のズボンのポケットを上から強く触ろうとする彼らの手を払いながら、大きな声でこういいました。

「君たちは何で私のポケットの触るのだ。何で君たちにポケットのものや財布を見せなければならないのだ」

彼らの中でいちばん歳をくった男がいいました。

「あなたは、いま手を入れていたチョッキのものは、見せてくれたじゃないですか。怪しいものをもっていないのならば、ズボンのポケットの中のものも見せなさい。なぜ、見せられないのですか。見せなさい。財布を出しなさい」

そういいながら、執拗に私のズボンのポケットに触ってくるのです。私はだいぶ冷静になってきました。この手を払いのけることは正当防衛的な行動ですから、公務執行妨害にはなるまいと思いつつ、強く払いながら大きな声でこういいました。

「私は、見せる気がない。何で財布まで見せなければならないんだ」

それでも、この4人の警察官は、ズボンのポケットの中を見せなさい、財布を見せなさいといって、私を取り囲み、そこを動かそうという私の自由を完全に奪っているのです。そして、こりもせずに何度も何度もズボンのポケットの上を強く触り、中のものを確かめようとするのです。『何で触るんだと詰問すると触るのは職務質問として許されているんだ』と開き直るのです。

正確な時間はこういう状況ですから分かりませんが、おそらく3~4分くらい揉み合い、いい合いました。私はこういうことをしながらも、極めて冷静になってきました。そして、本当に空恐ろしいものに遭遇した自分に気付きました。私は弁護士ですし、また国家公安委員長をしましたので、職務質問の有用性も問題性も、よく知っています。しかし、いま私が受けていることがこの職務質問であるとしたならば、これは空恐ろしいことであり、曖昧に済ますことはできないと思ったのです。怖いというのは、警察官が怖いということでは、もちろんありません。こんなことが職務質問として行なわれていることが、空恐ろしく思えたのです。こんなことは許されてはならない、ここはじっくり勝負しようと、私は考えはじめたのです。今度は「こっちの方が執拗に食い下ってやろう」と覚悟を決めました。

私は、なぜ私のポケットの中を見せなければならないのか、何度も何度も聴きました。彼らの答えは、「怪しいものがないのなら見せてください。見せられないのは、怪しいものを持っているからじゃないですか」というのです。「なんで私の体に触るんだ」と聴くと、触るのは許されているというのです。いくら見せなさいと言われても、見せるつもりは、私にはもう、まったくありませんでしたし、身体検査的に私の体を触ることは、職務質問としては許されないと思いましたが、これも、絶対に許すつもりはありませんでした。

「ポケットの中の物を見せなさい、財布を見せなさい。なぜ見せられないのですか。ますます見な

ければなりません。体に触るのは、許されているのです。弁護士さんに相談するという人もいますが、弁護士さんに警察官にいわれるとおりにしなさいといわれて、皆さん協力してくれるんですよ」



こんなことをいいながら、彼らは少しも態度を変えないのです。困みを解こうともしません。正直いって私の我慢も限界に近づきつつあったのですが、無理してこの困みを解こうとすれば、彼らが公務執行妨害として私を逮捕することは明白でした。人通りのある中、こんなことを10分以上繰り返しておりましたが、埒があかないことは明らかでした。彼らの言葉や行動は、棒を飲んだようにまったく変わらないのです。

私は、別にズボンの中にも何も怪しいものなど持っていませんでした。家の鍵と小銭が入っただけです。なぜ財布を見せろといったのか理解に苦しみますが、財布には4万ちょっとの現金と免許証と病院の診察券、それにパスネット(地下鉄のプリペイドカード)があるだけです。また、先ほどの振込みの控もありましたが、別に、見られたからといって困るほどのものでもありません。ですから、私が素直に見せれば、それで終わったかも知れません。また、それで終らせるのが賢明なやり方かも知れません。しかし、私にとって、これはもうそういう問題ではなくなっていたのです。こんなことがまかり通っていたのでは、自由も人権もあったものじゃないと私は考えていたのです。彼らも、よりによって変な人物に関わってしまったものです。

4. 人通りの多い渋谷の歩道で、「見せろ、見せない。触るな、触るのは許されているんだ」ということを15分くらい繰り返していました。遠巻きに時には人垣もできましたが、それは近くの信号待ちの時間だけでした。皆、関わり合いたくないのでしょう。本当は、誰のために鐘が鳴るなんですがね。さて、どうやって局面を変えようかと思ったのですが、彼らの言動は何度もいうようにまったく変わらないのです。局面を変えることは、極めて難しい状況でした。ですから、私は、ひとつのカードを切ることにしました。

「私は弁護士だ。いま君たちがやっていることは、警職法では許されることではない。私は君たちのやったことを署長に訴えなければならぬ。だから、まず君たちの認識番号を押さえておかなければならぬ。君たちの認識番号を書く。私はいまボールペンを持っていないから、貸してくれ」  
こういって、私はタバコの包み紙に4人の認識番号を控えました。彼らは素直にボールペンを貸してくれ、番号も見せました。

「それでは、渋谷署に行こう。しかし、私はいま風邪をひいていて、いままでほんとに寝ていたんだ。歩いていくのはちょっとシンドイので、タクシーで行く。君たちも乗っていいから、一緒に行こう」

こういって、タクシーを拾うために反対側の車線に行くために、近くの信号に渡ろうとしたのですが、4人組はこれを体を張って妨げるのです。そして、ここじゃなんですから、交番に行きましょうとさかんにいうのです。私は別に彼らと話すつもりもありませんでしたし、彼らと話しても何にもならないことですから、まったくとり合いませんでした。ですから、状況は先程とまったく変わらないのです。今度は、「渋谷署に行く。署長と話をする」と私がいい、「交番に行きましょう。交番で話を聞きましょう」と警察官が答えるという押し問答を同じ場所でまた10分くらいしたでしょうか。そうこうしている時、私は顔見知りの人を見かけましたので、ちょっと呼びました。彼は来てくれてました。私は事の次第を話して、「私が警察署へ行こうというのに、彼らが納得しないんだ。どう思う」とあえて周りの人にも聞こえるように大きな声でいいました。そして、数人が見ていることを確認して、私はタクシーを拾うために困みを振り切って道路を渡りました。タクシーを拾って警察署に行くために多少強引に4人組の困みを破っても、公務執行妨害で逮捕することはできないと状況と証人を作ったの行動でした。

とにかく20分くらい同じ場所で4人にグルリと囲まれていた状態から、私は道路の反対側に移ることがようやくできました。しかし、4人の警察官が私をグルリと取り囲んでいるという状況はまったく変わりません。私には、逃げるつもりなどまったくありませんでしたが、タクシーを止めてこれに乗り、渋谷署に行くということは、4人に行動で完全に阻止されていました。また、私が彼らの職務質問から解放され、自由にどこかに行くことができなかつたことはいまでもありません。

さて、これから先、この一件がどうなったと思いますか。一気に書き上げるつもりで向かったのですが、けっこう長くなりました。私の風邪はまだ治っていません。書くのが少しづらくなってきましたし、こんなことでせつかく治りかけている風邪が、また、ぶり返しても困りますから、明日以降の執筆として、今日はこのくらいで休みます。お許してください。

23:50東京の寓居にて

白川勝彦

.....

つぎの、「白昼堂々、・・・(その2)」は、2004年11月15日に加筆したものです。

白昼堂々、4人組が! (その2)

永田町途然草 <http://www.liberal-shirakawa.net/tsurezure/index.html>

<http://www.liberal-shirakawa.net/tsurezure/tsurezure.html> より

2004年11月14日

No.222

### 白昼堂々、4人組が! (その2)

1. (前号からのつづき) さて、渋谷警察署に行くために、囲みを振り切ってようやく反対車線きたものの、私の自由は依然として奪われたままでした。手をあげてタクシーを止めようとしても、4人の警察官が私の周りをグルリととり囲んでいる状態はまったく変わらないのです。こんな状態ですから、第一タクシーが止まってくれません。1、2台は止まってくれたのですが、私が乗り込むことができないので、そのまま先に行ってしまいます。こういう状態なのですから、私の自由は、事実上奪われているといってもいいのでしょうか。



事件当日の私の服装です。まあ、お世辞にもダンディとはいえませんが、見るからに犯罪者という風体でもないと思いますがねえー。ベストを着ていたのは、風邪のために悪寒がしていたために、厚着をしていたのです。私が立っているところが、事件現場です。私はここで4人組にいきなり取り囲まれたのです。どっちから4人組が私を襲ったのか、私はいまでも分かりません。その位、いきなりのことでした。

さすがに彼らも私を交番に連れて行くのは諦めたようです。後はどうやって渋谷警察署に行くかという問題です。渋谷署は、いま私たちがいるところから、1キロメートルくらい離れたところにあります。私は警察署長にあって、彼らがやったことを包み隠さず話し、反省してもらいたいから警察署に行くつもりですし、本気なのです。逃げる気など毛頭ありませんし、いまさら解放されても、私は渋谷署に行くつもりでした。いくら彼らがそれは勘弁してほしいといったって、今度は私の方がもう譲る気がないのです。

だから、私が渋谷署に行こうというのですが、その方法が問題になっているのです。

「私は、いま風邪をひいているので、渋谷署まで歩いていくのは正直に言ってしんどい。だから、タクシーで行く。君たちも乗ってもいい。もちろん、お金は私が払う。なんでこれがいけないのか?」

こう私がいうのですが、彼らはこういうのです。

「それはできないのです。私たちはタクシーには乗れないのです。パトカーを呼びますから、それで行きましょう」

こう繰り返すだけなのです。パトカーなら、タクシー代は確かにかからないが、理不尽な職務質問をさんざん受けた上、パトカーに乗せて下さる!? 冗談じゃない!!よくも平気でそういうことがいえるものだとさすがに腹が立ってきました。

「冗談じゃない。パトカーなんかにはのれるか! 私はタクシーで行く」というと、「私たちはタクシーには乗るわけにはいかないのです。それでは、歩いて行きましょう」というのです。私は、風邪がひどくやっとベッドから這い出てきたのですから、1キロちかくある渋谷署まで歩いていくのは本当にしんどいのです。このことを何度話しても、彼らの答えは同じなのです。

2. もうポケットの中のものを見せろ、見せないの問題ではなくなりました。タクシーかパトカーか、車でいくか歩いていくかの押し問答です。こんな押し問答を5~6分、車がひっきりなしに通る交差点の路上で行ないました。交差点ですから、信号が変わるたびに多くの人を通ります。私だって、こんなことをしているのは、嫌になってしまいます。だからといって、パトカーを差し向けて下さるというご好意を受ける訳にもいきません。また歩いていくのは、しんどいのでOKという訳にもいきません。どうして、こんな石頭を相手にしなければならないんだろうと苛立ってきました。



ハチ公前交差点から、道玄坂方面に行く歩道。商店や映画館がある、渋谷の有名な通りのひとつです。私は、このような人ごみの中を歩いていました。

しかし、彼らもさすがに参ったのでしょうか。4人組の一人が無線で上司と相談しれているようでした。間もなく、許可が下りたらしく、私がタクシーに乗っていくことを了承しました。手をあげてタクシーを止めました。一人が前に乗り、もう一人が私の側に乗らせてもらいますというのです。そんなことは、最初から私は当然のこととしていましたので、許可するもしないもないのですが、逆に私はこういいました。

「後に二人乗らなくていいのか？ 君たちは私がタクシーに乗って、怪しいものをタクシーの中に置いていく危険があるから、タクシーはダメだといったんのだろう。私の左右に二人乗ればいいじゃないか。お金は私が払うから」と同乗を勧めたのですが、「いえ、それはいいんです。逮捕ではないんですから」といって、一人だけが私の左側に乗りました。

彼らも状況が少し変だなと気付きはじめたようです。いままでに比べると態度がだいぶ丁寧になってきました。言葉使いも丁寧になってきました。車がけっこう混んでいましたので、1キロ足らずの距離でしたが、10分以上はかかったのではないのでしょうか。車中で、

「君たちはいつもあんな風な職務質問をするのか？ 日本という国も恐ろしい国になったもんだなあー。困ったことだ」

といいますと、

「私たちは、この渋谷の治安を守らなければならないのです。拳銃を持っている者もいれば、薬物を持っている者もいるのです。ですから、職務質問をして未然に犯罪を防止しなければならないのです」

というような趣旨の話をさかんにするのです。

しかし、彼らをこれ以上責めても、悪いことをしているという認識がないのですから仕方がないと思い、私は取り合わないことにしました。彼らと30分ちかく押し問答する中で、彼らが今日私にしたことを正当な職務行為だと信じ切っていることがよく分かりました。私がいくら彼らにいつて聞かせても、彼らが私のいうことを聴かないことは明らかです。私は、このような職務質問をさせている警察署長に現状を話し、これを改めさせるために渋谷署に向かっているのですから。途中、私は、警察署にタバコ販売機があるかどうか聞きました。もしなかったら、タバコを買っていこうと思ったからです。丁度、タバコがなくなっていたのです。けっこう長引くだろうから、タバコはいるなあと考えたのです。

3. 車は、渋谷署に着きました。代金を払い、署内に入りました。私は、入り口の近くの部屋に案内されました。取調室ではないようですが、応接室としては味気ない小さな固いソファが一つだけ置いてある広い部屋でした。まずは、タバコを確保しようと思い、自動販売機はどこかと聞いたところ、買ってきてくれました。灰皿がなかったので、ここは禁煙かと聞くと、床に置いてある大きな吸殻捨てをもってきてくれました。ドアを閉めないで、出入りする人が見えます。

タバコを吸って待っていると、何とか代理という人が出てきました。私は、署長としか話すつもりはなかったのですが、応対する人には興味ありませんでした。ですから、あえて肩書きには関心がなかったのですが、その警察官にも失礼ですが、申し訳ありませんが何とか代理としかいえないのです。

私は、その何とか代理さんに「今日私が職務質問を受けたことで、署長にいいたいことがあるのできました。署長にお会いしたい。私は国家公安委員長をしたことがある白川勝彦です」と告げました。何とか代理さんは、私を知らないようでした。また、国家公安委員長というのもよく知らないらしく、都の公安委員ですかとか、国家公安委員ですかとかいって、何度も書きかえていました。「私が平成8年9月から翌9年9月まで、国家公安委員長をしていた白川勝彦だということ。その白川が署長にお会いしてお話したい

ので、取り次いでもらいたい」旨を丁寧に説明しました。

よく分ったのか分らないのかしれませんが、その何とか代理さんは退席していきました。その代わり、今度は何とか課長さんという人が出てきました。張り切って出てきたその人には失礼ですが、私は署長と話すつもりしかありませんでしたから、その課長さんの肩書きにはまったく関心がなかったの、この人もまた何とか課長さんとしかしい様がないのです。その何とか課長さんは、何とか代理さんから変な風体をした公安委員長と称する者が来て、署長に会わせろといっているといわれて、こんなものは追い払わなければならないと思って張り切ってでてきたのだと思います。最初からいやに肩に力が入っていました。

しかし、私が見たいのは、署長だけです。誰が出てきても同じです。私は先の何とか代理さんにいったと同じように、国家公安委員長をした白川勝彦であること、今日職務質問を受けたことで署長に話をしたいので、取り次いでもらいたいといいました。そしたら、その何とか課長さんの返答がふるっているのです。

「国家公安委員長は、どうやって任命されるのですか。どういう仕事をするんですか」というのです。そんなことをどうして聞くのかと思ったのですが、要は私がかつて国家公安委員長をした白川勝彦だということ信じられないのでしょうか。住所はどこですかとか、そのときの総理大臣は誰ですかなどと執拗に聞くのです。しかし、何とか課長さんがどう思おうと、私がかつて公安委員長をした白川勝彦であることは間違いのない事実ですから、仕方ありません。

彼が私をどういう素性の人物だということ知らなかったのか、あるいは、知っているにもかかわらず署長に会わせることはできないと思ったのか不明ですが、とにかく、一向に署長に取り次ごうとしません。そして「もし、あなたが国家公安委員長をした人ならば、警察官を苦しめるようなこんなことはしないはずだ」とか何とかいうのです。今度は、私が国家公安委員長をした白川勝彦であるかどうか、押し問答の中心的なテーマとなりました。15分くらいこんな押し問答をしたでしょうか。しかし、要するに彼の言わんとすることは、署長には会わせる訳にはいかないということです。だったら、もうこの何とか課長さんと話をする必要はありません。

4. 「分った、もう、あなたに取次ぎは頼まない。直接私が面会を申し込む」といって、私はその部屋を出ました。別に制止はありませんでした。もし、私がおのまま警察署を出ようとした場合、彼らは制止したかどうか？ それは分かりません。制止はしなかったのではないかと私は思います。その証拠に、私についてきませんでしたから。何とか課長さんにしてみれば、なんとも得体の知れない人物には、早々に立ち去ってもらいたいというのが本音だったのではないのでしょうか。しかし、今度はこっちがそのまま引き下がる訳にはいきません。何としても今日私が受けたことを署長に知らせ、このようなことが行なわれないようにすることが私に与えられた任務であると確信し切っているのですから。

その部屋を出たところに、渋谷署のカウンターがあり、そこに「総合受付」というところがありました。そこで、署長への面会を申し込もうと思い、話はじめようとする、件の課長さんはあたかも大事件のように「受付はあっちです、あっちです」といって、入り口のカウンターを示すのです。それなら、「総合受付」というのは一体何なんだといいたくなります。しかし今は、くだらないことでクレームを付けられるのではなく、署長に面会することが先決ですから、入り口のカウンターで求められた申込書に必要事項を書いていました。すると、遠くのほうから大きな声で「白川先生!白川先生ではありませんか」といいながら、誰かが駆け寄ってきます。一体、どこのどなただろうかと思いました。

「私は、昔、警察庁の政府委員室にいた です。いまここで副署長をしています」といって、私を先程の部屋に引き戻しました。正直にいうと、私は彼を知りませんでした。彼が政府委員室にいたのは、平成7年までだそうですから、私が知らなくても不思議ではないのです。私が国家公安委員長を務めたのは、平成8年から9年ですから。

事情は、すでに部下から聞いていたのでしょうか。彼は警視庁の警察官ですが、警察庁に出向し、政府委員室という国会対策をするところに勤務していた関係で、私を知っていたのでしょうか。人定ができた以上は、これはそれなりの対応をしなければならないので、出てきたのだと思います。その証拠は、「一体何があって、いま私がここにいるのか」ということについて、まったく質問がでなかったことです。そして、今日起こったことには多少問題もある、ということも承知していたのだと思います。

この、人柄のよさそうな副署長は、政府委員室に勤務していた時や、私の国家公安委員長時代の話をし、私を誉めてくれるのですが、だからといって、私はそれに気をよくしてそのまま帰る訳にはいかないのです。私はまずお茶を所望しました。バカバカしい押し問答を相当長いことやっておりましたので、喉が乾

いていたのです。お茶を飲みながら、私は改めて事の顛末を詳しく副署長に話しました。そして、これはよくないことなので、ぜひ是正しなければならないといいました。さらに、このことを署長にもちゃんと伝えるようにいいました。彼から特に反論はありませんでした。

最後に、私は副署長に「現場にいた人でいちばん階級の高いものを選びなさい」といいました。勘違いしたのか、警邏(けいら)の現場の上司と思われる警察官がきました。しかし、私は実際に職務質問した警察官に話しかけたので、彼らの中で一番階級の高い者を選びなさいと、再び、いいました。4人組の中の一人がきました。君がいちばんの上司なのかと聞いたところ、階級は同じだが年齢が一番上だということでした。彼の上司には後ろで聞いてもらうことにして、彼と副署長に対して、私はこういいました。

「今日の職務質問で一番問題だったことは、ズボンのポケットの中のものを見せなさいとって、ズボンの上から強く触ったことである。見せる見せないは、あくまで私の意思でやることであって、これを強制する権限は、君たちにはない。『怪しいものがないのなら、見せてもいいじゃないですか』と君たちは執拗にいったが、それは根本が違うのだ。自由主義社会というのは、国家からの自由も、できるだけ保障する社会なんだ。私は自由主義者として、そういう社会を作ろうとして努力してきたのだ。怪しいものを持っていないのなら、見せなさい。見せられないということが、怪しいものを持っているからじゃないかと疑うことは、とんでもないはき違いなのだ。ここのところを、よく分ってもらいたい」

「君たちの中では、一体、誰が一番の大將なんだ。誰が現場において臨機応変な措置をすることになっているんだ。犯罪の現場だろうが、今日のような警邏であろうが、一つひとつの現場は、決してマニュアル通りにはいかないのだ。そこで、経験と臨機応変さが必要になるのだ。私は国家公安委員長時代、これからは“はぐれ刑事純情派”の藤田まこと(正式には、安浦刑事)のような刑事を大切にしていかなければならないといい、そのよう制度を作らせた。それは、そういうことをいいたかったのだ。それなのに、今日の君たちの対応は一体なんだ。石頭すぎる。副署長、これは、このような編成で警邏させる方に問題があるんじゃないかな」...などなど。

例によって、私の長演説に付き合ってもらうことになりました。しかし、私を長い間事実上拘束し、また私の名誉をいささか傷つける行為をしたのですから、このくらいは我慢してもらっても罰は当たらないでしょう。そして、最後に私はこう付け加えました。

「今日、私が体験したことは、私のウェブサイトを書くつもりだ。君たちもインターネットを見るんだらう。どう書くか、ぜひ見てもらいたい」

副署長は『今日のことはこれ限りにしてほしい』と頭を下げました。人のいい彼には申し訳ないことですが、私はこれには応ずることはできませんでした。私の体験は、貴重であり、また空恐ろしいことであり、こんなことを野放図にしてはならないと思ったからです。これは、もう私の不動の信念となっており、そして、まだ風邪気味でちょっとしんどいのですが、かなり長文のレポートを認め、ささやかではありますがこれを公にしました。

5. 「白昼堂々、4人組が!」などと大仰な見出しにもかかわらず、こんなことに過ぎないのか、大騒ぎする程のことじゃないではないか、という人もおられるかもしれません。しかし、私が経験したような状況の中で、私と同じ行動を取れる人が、果たしてそんなに多くいるのでしょうか。私は弁護士です。私は政治家です。私は国家公安委員長をしました。また私は熱烈な自由主義者です。そんな私だから、ここで詳しく書いたような行動を取れたのだと思います。

私は自慢話をしているのではないのです。自慢話なら、もっと別の行動でなければなりません。非礼かつ無法な4人組をちぎっては投げ、ぶっ飛ばしたというような話でなければなりません。実際のところ、あまりにもしつこいものでしたから、突き飛ばして4人組の囲みから脱出しようと何度も思いました。しかし、そんなことをすれば彼らの思う壺だと思ったから、やらなかっただけです。私は狡猾ただただなんです。考えてみれば、こんな意地悪な人物に目を付けてしまった4人組こそ、災難だったのかもしれない。

警察官に取り囲まれ、見せる見せないなどといって揉み合う姿は、決して格好いいものではありません。東京の繁華街ですから、顔見知りの方はあまりいませんが、それでも、私と知った人がいたかもしれません。名誉な光景では決してありません。だったら、素直に彼らのいうことを聞いていけばいいじゃないかという人がきっと多いでしょう。確かに、そうしても私は困るようなものを持っていた訳ではありませんから、直ぐに無罪放免になっていたかもしれません。しかし、自由主義者の一人として、それだけは絶対に認めることはできません。

いずれにしても、私と同じような行動を取れる人の方が少ないと思うのです。それが彼らの狙いで、職務質問ということで、本来は許されないことを平気でドンドンやっているのでしょう。テロとの戦争また治安の維持ということで、こうしたことが平気で罷りとおる社会的風潮だと思います。アメリカでは、9・11以降、アラブ系の人々などに対して、憲法で保障された人権をまったく無視する違法なことが行なわれていると聞いています。何でもアメリカ追随の日本ですから、こうなっても不思議ではないでしょう。しかし、そんなことは、絶対に許してはならないのです。

6. 最後に、今回は事実関係を中心としたレポートで終わります。私としては、できるだけ忠実に私が体験したことを書いたつもりです。別に誇張をしなくても、十分に問題のある(私にいわせれば、違法な)職務質問でした。しかし、私は一方の当事者です。しかも、かなり緊迫した状況の連続でしたから、客観性を欠く恐れはあるでしょう。ですから、私は、もう一方の当事者である4人の警察官に、釈明なり、反論の機会を保障します。若い警察官ですから、インターネットくらいは見れるでしょう。また、私は今回のことをウェブサイトで書くからとちゃんと書いておいたのですから、見ているでしょうし、見ていないようじゃ困ります。

私が書いた事実に釈明なり、弁明や反論があったら、Eメールで私宛てに送ってくれば、そのまま掲載することを約束します。もちろん、それに対する私の再反論の権利は当然のこととして留保します。また彼らの上司であり、直接の責任者である渋谷警察署長の釈明や反論も同じです。さらには、今回の私のクレームをどう受け止め、どのような措置をとったのか、これはぜひ伺いたいところでもあります。

「好きだから 正義で守る この街を」

警察官というのは、名刺を出さないんですね。私が会った全部で8人の警察官の中で、私に名刺をくれたのは副署長さんだけでした。彼が私にくれた名刺にある標語がこれです。警視庁全体のものか、渋谷署だけの標語かは知りませんが、おおいに結構なことです。

しかし、正義とは何か。ここで問題にされたのは、Due Process Of Law という考え方なのです。法の適正手続きなどと訳されますが、本来の意味はちょっと違うような気がします。国民の生命・身体・財産などに対する強制力の行使は、法が定める正当な手続きと方法に基づいて行なわれなければならないという、かなりポジティブな意味をもっている概念で、アメリカ法のもっとも基本的な理念のひとつです。勝てば官軍とか、結果良ければすべて良しとか、長いものには巻かれるなどという言葉がある日本では、これは、なかなか理解されない理念です。しかし、わが国が自由主義の国であるならば、絶対にながらにしている理念なのです。今回私が遭遇した警察官には、この理念に対する理解がまったくないと断ぜざるを得ません。だからこそ、私は空恐ろしいことと思ったのです。

Due Process Of Law は、正義です。特に警察権力の行使は、絶対的にDue Process Of Law の精神に基づいて行なわれなければなりません。わが国の警察権力や国家権力には、彼らが思っている程の信用は、ないのです。ですから、殊のほか Due Process Of Law が求められるのですが、その自覚がもっともないのが警察官であり、検察官であり、官僚です。ですから、ちょっと油断するとわが国は、警察国家になり、官僚王国になってしまうのです。「権利のための闘争」...[ドイツの法哲学者イエーリング](#)の有名な言葉です。この“権利のための闘争”というビヘイビアこそ、自由主義者としての私の発想と行動の原点です。

「好きだから 正義で守る この国を」

以上の言葉で本稿を締め括り、とりあえず筆を置きます。

23:50東京の寓居にて

白川勝彦

イエーリング Rudolf Von Jhering 1818-1892

歴史法学の立場からローマ法を研究、さらに法を社会における目的や利益の観点から分析・研究する必要性を説いたドイツの法学者。主著“ローマ法の本質”“権利のための闘争”“法における目的”等。法は究極的に個人の権利を保障するものであり、権利とは利益であると考えて、その基本的な部分の考え方を「権利のための闘争」という言葉によって表わした。「法の目的は平和であり、それに達する手段は闘争である」(ダス・ツィール・デス・レヒト・イスト・デア・フリーデ, ダス・ミッテル・ダーツー・デア・カンフ) [[読んでいたところへ戻る](#)]

.....

1349. 「戦後」から未経験の「戦時」

<http://www.asyura2.com/0403/war50/msg/714.html>

# 「戦後」から未経験の「戦時」、そして未来の「戦後」へ [小倉利丸氏]

<http://www.asyura2.com/0403/war50/msg/714.html>

投稿者 なるほど 日時 2004 年 4 月 07 日 16:46:19:dfhdU2/i2Qkk2

(回答先: [Re: 反戦ビラまき逮捕、起訴\(裁判は予断許さず。\)](#) 投稿者 戦争とはこういう物 日時 2004 年 4 月 05 日 02:02:09)

2004年01月14日

今現在が、時代の転換点だということは、必ずしも同時代の人間たちに自覚されるとは限らない。むしろ昨日とさほど変らない日常の連続のなかで、ふと気付くと、十年前、二十年前とは驚くほど異なる「今」を発見して愕然とするといったことのほうがありがちなのだと思う。ちょうど2003年という年は、こうした意味での時代の転換を画する年になったのではないだろうか。たぶん、2003年は、「戦後」が確実に終焉を遂げ、同時に「戦時」の出発となった年として後世の歴史家が語るに違いない年になったと思う。「戦時」というのは、いうまでもなく、日本の自衛隊がイラクに出兵することが決定された年だからである。自衛隊の海外出兵は、湾岸戦争を皮切りに90年代に繰り返されるが、明らかな戦場に武装をして戦闘をなかば前提として他国の占領の片棒をかついで出兵するというのは今回が初めてなのではないかと思う。自国の軍隊が他国を占領したり、戦闘行為を開始すればこれはれっきとした武力行使=戦争である。戦争を遂行している国家は戦時体制にあるとあっていい。だから日本は「戦時」なのだと言う以外にないのではなかろうか。

現在の戦時体制は、かつて日本が朝鮮半島を植民化し、アジアへの侵略を重ねる中で繰り返された「戦時」とは大きく異なる。現行憲法では戦争放棄が前提となっているから、戦争のための法体系がない。自衛隊法、有事法制、国民保護法制をはじめ戦争法の国内法整備が急ピッチで進められているが、憲法9条という最大の制約があるために、戦前のように戦争を国家の当然の行為の一つとして位置づけるような枠組は未だに存在しない。したがって、「日本は戦時か?」という問いに政府は「そうだ」と本音では考えているとしても決してこれは口には出せない。政府は常に戦争のための軍隊を出兵しながら、それを戦争ではないと言いくるめなければならない。憲法9条をかかえたまま戦時に突入するということは、政府自らが憲法を逸脱しているわけであって、このことは、法の正統性をそこない、法への信頼性を失わせ、法は権力を規制する力を喪失する。政府は法を超越した存在になる。しかも、こうした違憲状態を国会も裁判所も事実上コントロールできない。民主主義が機能していないのではなく、民主主義の意思決定の形式的な手続きが政府の超越的な権力に正統性を与えてしまう。こうした権力のあり方を一般にファシズムと呼んでいいだろう。

「戦時」というと、沖縄の地上戦や空襲、原爆投下といった日本の領土が戦場となったり戦渦に巻き込まれるとった状態を想定しがちだが、こうした状態はむしろ稀だと考えていい。日清戦争からいわゆる太平洋戦争の末期に至るまで、日本の戦争は常に領土の外で行われてきた。まさに今現在と同じように、軍隊が出兵するなかで日本本土の日常生活は大きな暴力にさらされることなく、昨日とさほど変らない今日を過ごしていたのではないだろうか。憲法9条下での「戦時」というきわめて特異な状況は戦前とは全く異なるが、他方で、大衆の戦争についての実感はもしかしたら今とさほど変らないものであったかもしれない。

「戦時」であれファシズムであれ、それらは目に見えるような大きな変化を伴って私たちの日常実感を否応なく変えるようなものではなく、むしろ大多数の大衆にとっては「戦時」はマスメディアが報道するニュースのなかにもみ存在する彼岸の出来事としてしか捉えられない。しかし、「戦時」は国民を戦争に動員する体制を整備しなければ維持できない。したがって、動員にとっての障害となる制度や人的な条件は徹底的に排除される。敵国の国籍を持つ人々、戦争や国家の動員体制を批判する人々は多かれ少なかれ最初に排除や隔離、あるいは拘束の対象になる。こうしたこの国のなかでマージナルな存在にある人々はもっと敏感に「戦時」を実感せざるをえないだろう。

しかし、「戦時」を公然とは言えない政府は、ここでは「戦争」のかわりにもっぱら「犯罪」や

社会の「安全」を口実に、マージナルな人々の排除と国民の統合、動員を押し進めようとしている。911の同時多発テロが起きた当初、ブッシュがいち早く「これは戦争だ」と口走って輿論を買ったが、だからといってテロを「犯罪」の枠組でとらえて、テロへの報復戦争は認められないが、犯罪取り締まりであれば警察の強制力の強化は認めざるを得ない、といった議論を認めるわけにはいかない。日本政府は、テロを犯罪として捉えると同時に、戦争としても捉えて一石二鳥を狙った。テロ対策を口実に、警察の治安維持機能を大幅に強化する一方で、テロとの戦争のために自衛隊を出兵させたのだから。

問題は、警察権力の治安維持機能強化や軍隊の出兵が問題の解決のための最適な手段ではないという点が常にあいまいにされ、警察や軍隊それ自体の拡大、強化が自己目的化されていることだ。テロは権力の膨張と暴走の口実として使われたにすぎない。法という束縛が事実上はずされ、民主主義の実質が失われ、テロ=犯罪、テロ=戦争という大義名分を得た権力は、権力の自己目的化、ある種の自己増殖過程に入ってしまったのだ。特に日本の場合、国民国家には国家を統合するための理念はない。建国の精神などというものは存在せず、天皇制という理念なき感情の幻想共同体があるだけだから、法による権力の規制に失敗すると、権力は自己目的化しやすい。しかも、現状のような米国というグローバルな帝国主義の同盟国という立場から、権力の自己目的とは同時に、米国への合理性を欠き説明不能な追従として現れることは不思議なことではない。

私たちは「戦時」に否応なく突入させられ、これに同伴させられているとすれば、こうした現状に対してどのようにしてあらたな「戦後」をいち早く実現するか、が私たちの大きな課題となる。反戦運動は全く新たな「戦後」を目指さなければならない。「戦後」とはもはや過去のことでなく、私たちが一刻も早く達成しなければならない未来を指し示す言葉であると同時に、「戦後」それ自体が闘いとられなければならない両義的な意味合いをもつものなのだ。

アフガンやイラクについては「戦後」が語られることが多いが、しかしそれは文字通りの戦後とはいえない。むしろ事実上の戦闘状態が継続している。さらに、こうした諸国の「戦後」は同時に資本主義としての復興という意味をもたされている。その結果、この資本主義化と表裏一体といってもいい宗教的原理主義の暴力からの解放が達成できない。日本の「戦後」も同様に、今再びの資本主義の戦後なのだとすれば、同様に、この「戦後」は日本におけるファナティックなナショナリズム=天皇原理主義の暴力をますます呼び覚ますかもしれない。僕は未来の中に見い出すべき「戦後」を資本主義的な戦後として描くことは決して文字通りの戦争の終焉、戦争の後に来たるべき世界を描くことにはならないと思う。資本主義を選択するという事は、戦争の後にまた新たな戦争を生み出すに違いないからだ。

「戦時」体制を一刻も早く終焉させなければならないが、しかし同時にこのことは、グローバルな市場経済が戦争を招き寄せてきたという歴史的な経緯を決して忘れてならないのであって、「戦時」の終焉をいかにしてグローバルな資本主義の終焉の方向に引き寄せられるか、これが実はもっとも問われなければならない課題なのだと思う。(Posted by toshi at 01:43)

[出典] No More Capitalism [http://www.jca.apc.org/~toshi/blog/no\\_more\\_cap/](http://www.jca.apc.org/~toshi/blog/no_more_cap/)

このサイトは、地球規模で蔓延する資本主義が経済的搾取、戦争、テロ、差別を生み出す主要な原因と考え、これ以上蔓延を食い止めるための知と戦略のための実験室です。転載、リンク全て自由です。

[http://bbs12.otd.co.jp/yuji\\_story/bbs\\_plain?base=1660&range=1](http://bbs12.otd.co.jp/yuji_story/bbs_plain?base=1660&range=1)

.....

1339 . 『自衛隊がいる所が非戦闘地域』相当おかしい暴言の数々 [返信 引用](#)

名前：なるほど 日付：11月12日(金) 22時17分

・小泉に精神鑑定の必要性【日刊ゲンダイ】

<http://www.asyura2.com/0411/war62/msg/1080.html>

1339 . 『自衛隊がいる所が非戦闘地域』相当おかしい暴言の数々

<http://www.asyura2.com/0411/war62/msg/1080.html>

## 『自衛隊がいる所が非戦闘地域』相当おかしい暴言の数々・小泉に精神鑑定の必要性【日刊ゲンダイ】

<http://www.asyura2.com/0411/war62/msg/1080.html>

投稿者 ジャック・どんだん 日時 2004年11月12日 21:46:32:V/iHBd5bUIubc

日刊ゲンダイ 2004年11月13日(12日発行)

この人の頭は大丈夫なのか。党首討論で「自衛隊が活動している地域は非戦闘地域だ」と、とんでもない答弁を繰り返し、大顰蹙を買った小泉首相。記者団には「適切ないい答弁だった」と自画自賛だ。ここまでくると単なる「変人」というレベルじゃない。精神鑑定が必要じゃないのか。

小泉首相の暴言失言はキリがないが、最近はかなり異常だ。

自身の政治資金流用疑惑には「政治活動は個人それぞれ。事務所費もそれぞれ」とおちゃらけ。イラクの人質事件の最中の披露宴出席を批判されると「じゃあ、じっとしていればいいのか」と逆ギレ。大好きなブッシュ大統領が再選すれば「大したもんだ。これだけ世界から批判されて指導力を発揮されて。見習わないといけない」ともう訳がわからない。

「首相の心理状態は明らかに不安定です。ドン詰まりの三位一体改革には『誰かいい知恵出してくれる』と親しい議員に呪文のように繰り返し、最近の与党内からの批判には『じゃあ(民主党と)どっちの政権がいいんだ』と周囲にアタリちらす始末です」(官邸事情通) やっぱり、どこかおかしいんじゃないか。東邦大学医学部助教授の高橋紳吾(精神科医)はこう分析する。

「最近の首相は、他人を小バカにした発言が目立ちます。自分だけが絶対に正しい、という独善的な気質のあらわれで、純粹培養で育ったお坊ちゃまタイプに多く見られる傾向です。精神医学上は『パラノ』(偏執狂)。自分の世界にこもり、ある意味ナルシスト。他人の意見を受け付けず、自分の考え、偏見に固執するのが特徴です。

『信念の人』といえはかっこいいですが、要するに頑固なだけ。自分に都合の悪い情報を遮断するため、裸の王様になっているのです。」

こんな人物に郵政民営化や三位一体改革、自衛隊派遣延長など、山積みする課題を任せられることができるのか。

小泉首相に必要なのは改革より休養・・・・・・・・。(終わり)

靖国参拝して、一見愛国者のふりして、実際やってることといたらアメリカ流の構造改革・地域経済・地域共同体破壊の純然たるアメリカニズムそのものやんか。

[次へ](#) [前へ](#)  
[戦争62掲示板へ](#)

フォローアップ:

[悪行功績は、ネット右翼を育て、権力者自らが情報操作、世論操作に積極的に乗り出したこと。](#) 木田貴常 2004/11/12 22:31:10 (0)

[消息筋によると小泉は辞めたいと言うのに姉が許さない末期症状である。](#) 木村愛二 2004/11/12 21:55:45 (1)

- [Re: ほとんど脳死状態、生命維持装置で生きながらえているといったところでしょうか。\(本文なし\)](#) 南青山 2004/11/13 02:46:45 (0)